

イライジャ - ナンバー・トゥエルブ

すべての谷は高められる。

Jeff Pippenger

2023-10-17

私たちは引き続き、エリヤを預言的象徴として取り上げている。エリヤはアハブに、三年の間、自分の言葉によらなければ雨は降らないと宣言した。

ギレアデの住民の中のテシベ人エリヤはアハブに言った。「私が御前に立って仕えるイスラエルの神、主は生きておられる。私の言葉によらなければ、この数年の間、露も雨も降らない。」列王記上 17:1

キリストはルカによる福音書で、その三年は実際には三年半であったと私たちに教えています。

そして言われた、「まことに、あなたがたに言う。預言者は自分の故郷では受け入れられない。しかし、真実を言う。エリアスの時代、天が三年六か月の間閉ざされ、全土に大きな飢饉があったとき、イスラエルには多くのやもめがいた。だが、そのうちのだれのもとにもエリアスは遣わされず、ただシドンの町サレプタの、やもめの女のもとにだけ遣わされたのである。」ルカ 4:24-26。

その三年半はアハブとイゼベルの時代に起こり、したがって、テアテラの教会でイゼベルとして象徴される教皇制が暗黒時代に支配していた538年から1798年までの預言的な三年半を指し示している。

しかし、あなたに対して責めるべきことがいくつかある。自ら預言者と称するあの女イゼベルが教え、わたしのしもべたちを惑わして淫行を犯させ、また偶像に供えたものを食べさせることを、あなたが許しているからである。わたしは彼女に、その淫行を悔い改める機会を与えたが、彼女は悔い改めなかった。見よ、わたしは彼女を床に投げ込み、また彼女と姦淫を行う者たちを、その行いを悔い改めないなら、大いなる患難の中に投げ込む。また、彼女の子らを死で打ち殺す。こうして、すべての教会は、わたしが腎と心を探る者であることを知り、そして、わたしはあなたがた一人ひとりに、その行いに応じて報いる。ヨハネの黙示録 2:20-23。

イゼベルの「悔い改めるための猶予」は、エリヤの時代には三年半であり、また教皇による迫害の暗黒時代においては538年から1798年までの預言上の三年半であった。イゼベルと、彼女と姦淫を行ったヨーロッパの王たちへの罰は、患難の床に投げ込まれることと、彼女の子らの死であった。暗黒時代にも、同じく患難の床に投げ込まれた忠実な者たちがいたが、彼らはいのちを得ることになる。患難の床に投げ込まれたとき、忠実な者にはいのち、不忠実な者には死という結果は、彼らの「わざ」に基づいていた。忠実な者たちの患難の床は、忍耐といのちを生み出した。彼らの患難の床は、三年半の終わり頃、エリヤがサレプタを去ってアハブにイスラエル全体をカルメル山に召集するよう命じる直前に、終わることになる。

教会に対する迫害は、1260年の全期間にわたって続いたわけではなかった。神はご自分の民をあわれみ、その苛烈な試練の時を短くされた。教会に降りかかる「大患難」を予告して、救い主は言われた。「その日々が短くされなければ、いのちのある者はひとりも救われない。しかし、選ばれた者のために、その日々は短くされる。」マタイ 24:22。宗教改革の影響により、迫害は1798年以前に終結した。『大論争』266、267ページ。

教皇制に対する「患難の寝台」の裁きは「彼女の子らを死によって殺す」ことになるが、その「患難の寝台」の裁きには、行いによって忠実さを示した者たちには命の約束が含まれており、サレプタのやもめの子の死にそれが示されている。

そしてこれらのことの後、その家の女主人の息子が病気になった。病は重く、ついには彼のうちに息がなくなった。彼女はエリヤに言った。「神の人よ、私とあなたに何の関わりがあるのですか。私の罪を思い起こさせ、私の子を殺すために私のところに來られたのですか。」彼は彼女に言った。「あなたの子を私に渡しなさい。」彼は彼女のふところからその子を受け取り、彼が滞在していた上の部屋に運び、自分の寝床に寝かせた。そして彼は主に呼ばわって言った。「ああ私の神、主よ。私が身を寄せているこのやもめにまで災いをもたらし、その子を殺してしまわれたのですか。」そして彼はその子の上に身を伸ばして三たび伏し、主に呼ばわって言った。「ああ私の神、主よ、どうかこの子のたましいをもう一度彼のうちに戻してください。」主はエリヤの声を聞かれ、子どものたましいは再び彼のうちに戻り、彼は生き返った。エリヤは子どもを抱き、上の部屋から家の中へ降りて彼の母に渡し、言った。「見なさい、あなたの子は生きています。」女はエリヤに言った。「今、これによって、あなたが神の人であり、あなたの口にある主の言葉が真実であることを知りました。」列王記上 17章17-24節

やもめは、彼女の子を生き返らせた「主のことば」が「真理」であるゆえに、エリヤが「神の人」とであると認めた。エリヤがやもめの子の上に身を三度伸ばしたという過程は、やもめには、エリヤの口にある「ことば」が「真理」であることとして理解された。ヘブライ語の「emeth」は、この箇所では「真理」と訳され、アルファとオメガの創造の力を表している。それは、ヘブライ語のアルファベットの第一、十三、そして最後の文字から成る語であり、死者を生き返らせることのできる力を表している。

三年半によって表される猶予期間という「空間」において、忠実な者たちは、不信仰な者たちと同様に、「患難の床」という裁きを受けた。姦淫を犯し、異教の教義を教えた淫婦に従った一派の子らには、結末として死がもたらされた。他方、エリヤの指示に従い、「真理」の言葉を信じたもう一方の一派には、いのちが与えられた。

やもめは、エリヤの命令に従って、彼に水を汲んで持って行き、パンを与えた。彼女の預言者の言葉への従順は、テアティラの暗黒時代における忠実な者たちを表している。（注目すべきは、エリヤがやもめに、まず自分に食べさせ、その後で彼女の子と彼女自身に食べさせるよう命じたとき、そこで示されているのは、食物を最初に受け取るのがエリヤであるという点である。彼がまずメッセージを受け取り、その後教会が受け取るのである。）私たちは、忠実な者たちのわざが、初めよりも終わりのほうが大きかったと知らされている。

テアテラにある教会の御使いに書き記せ。神の子、すなわちその目は燃える炎のようで、その足は輝く青銅のようである方が、こう言われる。わたしはあなたの行いと、愛と、奉仕と、信仰と、忍耐と、またあなたの行いを知っている。後のものが初めのものにまさっていることも知っている。ヨハネの黙示録 2:18、19。

教皇制が悔い改めるために与えられていた「期間」のあいだ、忠実な者たちは善い「わざ」を示したが、終わりには彼らのわざは「初めのものより多かった」。その「期間」が終わろうとすると、キリストは宗教改革の暁の明星を遣わした。その人は、教会に「淫行を行い、偶像に供えられた物を食べる」ことを教えた教皇制を、もはや容認しない働きを始めた。

そして、勝利を得て、わたしのわざを終わりまで守る者に、わたしは諸国の民に対する権威を与える。彼は鉄の杖で彼らを治め、陶工の器のように彼らは粉々に打ち砕かれる。わたしが父から受けたのと同じように、わたしはまた、その者に明けの明星を与える。耳のある者は、御霊が諸教会に語ることを聞きなさい。ヨハネの黙示録 2:26-29

教皇権に悔い改めのために与えられた「期間」の初めには、キリストは忠実な者たちに対して「いくつか責むべきこと」があった。というのも、彼らは、自らを女預言者と称し、教え、わたしのしもべたちを誘惑して淫行を犯させ、また偶像に供えた物を食べさせるイゼベルを許していたからである。だがその「期間」の終わりには、忠実な者たちは、教皇権がその惑わしを続けるのをもはや容認しなくなるだろう。

14世紀、イングランドに「宗教改革の暁の明星」が現れた。ジョン・ウィクリフは、イングランドだけでなく全キリスト教世界のための改革の先駆者であった。彼に表明することが許されたローマへの大いなる抗議は、決して黙らせることはできなかった。その抗議は、個人、教会、そして国家の解放へとつながる闘いの幕を開けた。『大いなる論争』80ページ。

神のしもべたちが食べる糧は、彼らが受ける教義やメッセージである。姦淫とは、教会が国家権力を用いて、自らの偶像崇拜的教義を強制することである。イゼベルに悔い改める「猶予」が与えられていた間に、教会は身を守るために荒野へ逃れた。

そして女は荒れ野へ逃げた。そこには神によって備えられた場所があり、そこで彼女は千二百六十日の間、養われた。……そして女には大鷲の二つの翼が与えられ、彼女は自分の場所である荒れ野へ飛んでいった。そこで彼女は蛇の前から逃れて、一時と二時と半時の間、養われた。すると蛇は女を押し流そうとして、口から洪水のように水を吐き出した。すると地は女を助け、地はその口を開いて、竜が口から吐き出したその洪水を飲み込んだ。ヨハネの黙示録 12章6節、14-16節。

イゼベルとアハブによる迫害の時代、オバデヤは、教皇制の時代に荒野がもたらした保護を象徴していた。

アハブは、自分の家の家宰であったオバデヤを呼び寄せた。（さて、オバデヤは主を大いに畏れていた。というのは、イゼベルが主の預言者たちを殺したとき、オバデヤは百人の預言者を取り、五十人ずつ洞穴に隠して、パンと水で彼らを養ったからである。）列王記上 18:3、4

洞窟に五十人ずつ預言者たちを隠したオバデヤの働きは、神が忠実な者たちを養うために荒野に備えられた場所の象徴である。彼らは教皇制の教義を受け入れることを拒み、また、彼女のヨーロッパの諸王との姦淫によって表される不浄な関係を受け入れることも拒んだ。エリヤが、食物とイゼベルとアハブからの保護のためにサレプタのやもめのもとへ導かれていた期間は、教会が荒野へと逃れた期間であり、神が彼らのために備えられた場所はオバデヤの働きによって表されていた。

エリヤが身を隠したサレプタは、ヘブライ語では「ザレファト」と呼ばれ、その名は「清め」を意味する。イゼベルに悔い改めのために与えられていた猶予が尽きると、エリヤはオバデヤのもとへ行き、アハブを呼び出して、イスラエルの民すべてをカルメルに集めるよう命じた。

オバデヤが道を進んでいると、見よ、エリヤが彼に出会った。彼は彼だと知り、顔を地に伏して言った、「わが主エリヤよ、あなたですか」。彼は答えた、「わたしだ。行って、あなたの主人に、『見よ、エリヤがここにいる』と告げよ」。列王記上18章17、18節。

エリヤがサレプタのやもめと共に過ごした時期は、暗黒時代を象徴している。エリヤとやもめの物語では、彼女は死にかけていたため、二本の小枝を集めていた。預言においてやもめは教会を象徴し、彼女は死にかけていた荒野の教会を象徴していた。

サルディスにある教会の御使いに書き記せ。神の七つの霊と七つの星を持つ方がこう言われる。わたしはあなたの行いを知っている。あなたは生きているという評判はあるが、実は死んでいる。目を覚まして、まだ残っている、今にも死にそうなものを強めなさい。わたしは、あなたの行いが神の前に完全であるのを見出さなかったからである。ヨハネの黙示録 3:1、2。

彼女は「小枝を二本集めて」自分の死の準備をしていたとき、エリヤが彼女を遮った。

そして主の言葉が彼に臨んで言った。「立って、シドンに属するツアレファテへ行き、そこで住め。見よ、わたしはそこで一人のやもめにあなたを養うよう命じた。」彼は立ってツアレファテに行った。彼が町の門に来ると、見よ、そこに一人のやもめが薪を拾っていた。彼は彼女を呼んで言った。「どうか器に少し水を持ってきて、私に飲ませてください。」彼女がそれを取りに行こうとすると、彼は彼女を呼んで言った。「どうかあなたの手に一切れのパンも持ってきてください。」彼女は言った。「あなたの神、主は生きておられます。私は焼いたパンを持っていません。ただ、かめに一握りの小麦粉と、つぼに少しの油があるだけです。今、私は二本の薪を拾い、それを持ち帰って、私と息子のために作って食べ、それで死のうとしているのです。」列王記上 17:8-12。

サレプタのやもめは「二本の枝」を集めていた。やもめは、イゼベルの時代の忠実な者たちを表している。彼女の息子は、テアテラの時代に、第一の復活にあずかるとの約束を抱いて死んだ人々を表している。

また私は王座を見た。彼らがその上に座っており、裁く権威が彼らに与えられた。また、イエスの証しと神の言葉のゆえに首をはねられ、さらに獣やその像を拝さず、額にまたは手にその刻印を受けなかった者たちの魂をも見た。彼らは生き返り、キリスト

と共に千年の間統治した。しかし、残りの死者たちは、千年が終わるまでは生き返らなかった。これが第一の復活である。第一の復活にあずかる者は幸いであり、聖なる者である。そのような者たちには第二の死は及ばない。彼らは神とキリストの祭司となり、彼と共に千年の間統治する。ヨハネの黙示録 20:4-6

やもめはまた、ふさわしい者とされ、白い衣を与えられたサルデスにいる少数の者たちをも象徴している。

サルデスには、衣を汚していない者がなお幾人かいる。彼らは白い衣を着て、わたしと共に歩む。彼らはふさわしいからである。勝利を得る者は、このように白い衣を着せられ、わたしはその名をいのちの書から消しはしない。むしろ、わたしの父の前で、また父の御使いたちの前で、その名を言い表す。黙示録 3:4、5

第四の教会であるテアティラに属し、忠実に死に、やもめの息子によって象徴されている者たちは、第五の封印で白い衣を与えられた。

そして、彼が第五の封印を開いたとき、私は祭壇の下に、神の言葉のゆえに、また彼らが持っていた証しのゆえに殺された者たちの魂を見た。彼らは大声で叫んだ。「いつまでですか、主よ、聖なる方、真実な方よ。地に住む者たちに対して、いつまであなたは裁きを行わず、私たちの血のかたきを討ってくださらないのですか。」そして、彼ら一人ひとりに白い衣が与えられ、さらに彼らに言われた。「しばらくのあいだ休んでいなさい。あなたがたの仲間のしもべたちや兄弟たちで、あなたがたと同じように殺されることになっている者たちの数が満ちるまで。」黙示録 6:9-11。

暗黒時代の殉教者たちは白い衣を与えられ、彼らが殺されたのと同様に、教皇制によって殉教する別の一群が殺されるまで、墓の中で休むように告げられた。彼らは三年半の期間に教皇制によって殺され、最終的に教皇制が裁かれると約束されたが、それは、間もなく到来する日曜法の危機の間に、第二の一群の教皇制によって殉教する者たちが殺されるまで実現しない。ホワイト姉妹は、殉教者たちが教皇制に対する裁きを求める訴えを、黙示録の二つの箇所と結びつけている。

「第五の封印が開かれたとき、黙示を受けたヨハネは、幻のうちに、神の言葉とイエス・キリストの証しのために殺された人々が祭壇の下にいるのを見た。これに続いて、忠実で真実な者たちがバビロンから出て来るよう召し出される、黙示録第18章に記された光景が現れた。[黙示録18章1-5節、引用]」『Manuscript Releases』第20巻、14頁。

黙示録18章1節から5節は、1節と4節の二つの声を表している。第二の声はバビロンから出て来るようにとの呼びかけであり、第三の天使の大いなる運動が神のほかの群れをバビロンから呼び出すとき、日曜法による迫害の始まりを告げる。彼女はまた、第五の封印の箇所を第七の封印の開封に位置づけている。

[黙示録6:9-11引用]。ここでヨハネに示された光景は現実のものではなく、将来のある時期に起こる事柄であった。

「『ヨハネの黙示録』8章1～4節を引用。」『Manuscript Releases』第20巻、197頁。

ヨハネの黙示録第8章1節から4節で、第七の封印が解かれる。

彼が第七の封印を開いたとき、天では半時間ほどの沈黙があった。私は、神の御前に立つ七人の御使いを見た。彼らには七つのラツパが与えられた。さらに別の御使いが金の香炉を持って来て、祭壇の前に立った。彼には多くの香が与えられ、み座の前にある金の祭壇の上で、すべての聖徒の祈りとともにそれをささげるためであった。そして、その香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上っていった。ヨハネの黙示録 8:1-4.

暗黒時代の殉教者たちの祈りは、第五の封印において、地の王たちと淫行を行う大淫婦に裁きを下してくださるよう神に願い求めており、第七の封印が開かれるときに「神の御前に」上る。靈感は第七の封印の開封を黙示録18章の第二の御声と結びつけており、というのも、その第二の御声において神は彼女の不義を思い起こし、彼女への裁きを倍にされるからである。すなわち、暗黒時代の殉教者たちのために一度、そして日曜法危機における大虐殺のためにもう一度。

また、私は天から別の声を聞いた。「わたしの民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずからず、彼女の災いを受けないためである。彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不義を思い起こされた。彼女があなたがたにしたように、彼女に報いよ。その行いに応じて、彼女に二倍を返せ。彼女が満たした杯には、彼女のために二倍を満たせ。」ヨハネの黙示録 18:4-6

衣を汚さなかったサルデスのわずかな者たちは、1798年に終わったテアテラの歴史から出てきた者たちを表している。彼らはサレプタのやもめ、すなわち1844年に婚礼に赴こうとしていたやもめによって表されている。

ダニエル書8章14節に示されている、聖所の清めのために私たちの大祭司としてキリストが至聖所に来られること、ダニエル書7章13節に示されている人の子が「日の老いたる者」のもとに来られること、そしてマラキが予告した主がご自分の宮に来られることは、いずれも同じ出来事の描写である。また、これはマタイ25章の十人の乙女のたとえにおいてキリストが述べられた、花婿が婚礼に来ることによっても表されている。『大争闘』426ページ。

そのやもめは、死ぬ前の最後の食事を準備していたとき、エリヤが彼女に自分に食事を出すよう命じた。彼女は、テアテラの忠実な少数者を象徴し、やがて「火」のために「二本の棒」を集めていたサルデスの忠実な少数者へと移り変わることを示している。

「二本の棒」は、異教とその後の教皇制によって踏みにじられた古代イスラエルの二つの家を表しているが、1798年から1844年にかけて集められ、「一本の棒」として結び合わされるはずであった。

主のことばが再びわたしに臨み、こう言われた。「さらに、人の子よ、一本の棒を取り、その上に『ユダのため、また彼の仲間であるイスラエルの子らのため』と書け。次に、もう一本の棒を取り、その上に『ヨセフのため、すなわちエフライムの棒、および彼の仲間であるイスラエルの家のすべての者のため』と書け。そして、それらを互いに合わせて一本の棒とせよ。あなたの手のうちでそれらは一つとなるであろう。あなたの民の子らがあなたに、『これらであなたは何を意味するのか、私たちに示して

くれないか』と言いかけてきたなら、彼らに言え。『主なる神はこう言われる。見よ、わたしはエフライムの手にあるヨセフの棒と、彼に連なるイスラエルの部族を取り、それらをユダの棒と一緒にし、一本の棒とする。こうして彼らはわたしの手のうちの一つとなる。あなたが文字を書いたそれらの棒は、彼らの目の前であなたの手のうちにあるであろう。彼らに言え。主なる神はこう言われる。見よ、わたしは彼らが行ってしまった諸国の民の中からイスラエルの子らを取り、四方から彼らを集め、彼らの地へ連れて行く。わたしはその地、イスラエルの山々の上で彼らを一つの国民とし、彼らすべての上に一人の王が王となる。彼らはもはや二つの国民とはならず、二つの王国に分けられることも二度とない。彼らはもはや偶像や忌むべき物、また一切の背きによって自らを汚すことはない。わたしは彼らが罪を犯したそのすべての住まいから彼らを救い出し、彼らを清める。こうして彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。わたしのしもべダビデが彼らの上に王となり、彼らは皆一人の牧者を持つ。彼らはまた、わたしのおきてに歩み、わたしの定めを守って行こう。彼らは、あなたがたの先祖が住んだ、わたしのしもべヤコブに与えたその地に住む。彼らも、その子らも、その子らの子らも、永遠にそこに住む。わたしのしもべダビデが、とこしえに彼らの君となる。さらに、わたしは彼らと平和の契約を結ぶ。それは彼らとの永遠の契約となる。わたしは彼らを住まわせ、増やし、わたしの聖所を彼らのただ中に、とこしえに置く。わたしの幕屋もまた彼らとともにある。まことに、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。わたしの聖所がとこしえに彼らのただ中にあるとき、わたしが主であってイスラエルを聖別する者であることを、諸国の民は知る。』」
エゼキエル書 37章15-28節。

エリヤがサレプタを去ってアハブと全イスラエルをカルメル山に召集しに行くとき、荒野へ逃れたやもめの教会は、1844年10月22日の婚礼に先立ってやもめを清める火のために小枝二本を集めていた。二本の枝を集めることとは、イザヤ書7章に示されている最後の65年の期間に成し遂げられるミラー派運動の結集のことである。北王国は紀元前723年から1798年までモーセの呪いを被り、南王国は紀元前677年から1844年まで同じ呪いを被った。1844年には、それら二つの文字通りの国の霊的な子孫が、一本の棒、すなわち一つの民として共に集められた。

少なくとも、エゼキエルは二本の棒を一つの国となる二つの国だと定義している。

アラムの頭はダマスコ、ダマスコの頭はレツィン。六十五年のうちにエフライムは打ち砕かれて、もはや民ではなくなる。エフライムの頭はサマリヤ、サマリヤの頭はレマリヤの子。もしあなたがたが信じなければ、必ず堅く立つことはできない。イザヤ書 7:8、9

もし私たちが六十五年の預言を信じないなら、私たちは確立されまいだろう。

次の記事でエリヤの象徴について引き続き取り上げます。